

# 仏様のおはなし新シリーズ第139集「御文章「白骨の章」について」

「されば人間のはかなきことは老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまゐらせて、念佛申すべきものなり」  
これは、蓮如上人の「白骨の章」の一文です。その意味は「人間の命のはかないことは『年寄りが先に亡くなるか若い方が亡くなられるかは定まつていません』ので、どなたの方もご自分の命の終わりを心に思い、阿弥陀さまに深く帰依をなさうて念佛申すべきものでございましょう。

このお手紙の「朝(明日の朝)には紅顔あつて、夕べには、白骨となれる身なり」は、教科書の副読本に載るほど有名で、人の心に訴えかけるものでございます。

先日、ある臨床宗教師にお会いしてお話を聞きましたところ、その方はある病院の緩和ケア病棟(末期がんの方が入るところ)に勤めてあつて、毎日患者さんにあつてあるそうです。その印象は「たくさんの方が命を終えてゆかれるけど、死を受容している人は2%くらいであとは受け入れておられない」とのことでした。

(臨床宗教師というのは、東日本大震災を契機として岡部健医師が被災者に接する中で「生の反対側には一筋の道も一灯の道標もなく、真っ暗な闇が広がっているばかり」「死にゆく人の道標が欲しい」との思いから臨床に宗教家が来られて患者さんの話を聞いてほしいとして、東北大学にその養成講座を寄付させてできたものです)さて、その方の話を聞いて驚きました。私も月数回ですが30年に亘って病院で傾聴ボランティアをしていましたがそれほどとは思つていませんでした。その時に思い出したのは親鸞聖人のお手紙(第255通)の言葉です。

「弥陀の本願と申すは、名号をとなへんものをば極楽へ迎へんと誓はせたまひたる  
を、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて  
候ふなり」

阿弥陀さまの本願とは念佛を称えようとするものをば、極楽に迎えようとお誓いになつたことを深く信じて称えるのが素晴らしいのです、とおっしゃっています。念佛しようと思つたその時、すでに阿弥陀様にすくいとられて淨土に生まれることになつてゐるのでです。ですから、死んだらどうなるかとか心配せずに、しつかりと今を生きる念佛の人生になるのであります。

